

令和6年能登半島地震における 災害派遣保健師チームに参加して

みしろ ゆき
三代 由紀

島根県 食肉衛生検査所

はじめに

令和6年元旦、石川県能登地方で震度7の地震が発生しました。私は、島根県で公衆衛生獣医師として食品衛生や環境衛生などの業務に従事してきた経験から、感染症予防における環境衛生の重要性を強く感じていました。また、環境衛生や避難所衛生についてオフィス環監未来塾の中臣昌広先生のもとで学んできたことから、何らかの役にたてばと思い、災害派遣保健師チーム（保健師2名、他職種2名の4名1組）に手を挙げ、3月24日から29日までの6日間石川県の被災地に入りました。初めて被災地支援に参加した私が感じたことを記します。

活動内容

私はロジスティクス^{※1}担当（以下、ロジ）として、保健師の避難所巡回や高齢者宅の個別訪問に同行しました。発災から約3カ月が経過し、水道は8割程度復旧、一部の飲食店やコンビニも再開していました。

※1：保健師の業務調整員として、保健活動が円滑に行われるよう後方支援する業務。事務職から技術職まで保健師以外の幅広い職種の職員で構成される。

活動期間：令和6年3月24日～29日
（5泊6日）

活動行程：24日石川県へ移動、金沢泊
25日能登地方へ公用車移動、
前班から引継ぎ
26日避難所訪問、個別訪問
27日個別訪問
28日後班との引継ぎ、公用車
移動、金沢泊
29日帰県

ロジの役割と課題

（1）安全運転と効率的な移動

ロジは、保健師を車で安全に避難所や個人宅へ連れていかねばなりません。被災地の道路は波打ったり陥没したりしており、障害物もありました（写真1・写真2）。

不慣れた土地での訪問先の把握には、車のナビ、スマートフォン、タブレットPC、紙の地図などを使いました。限られた時間内で最大限の支援を行うためには、ロジ同士の連携が欠かせませんでした。ペアになったロジ担当は地域振興部の研究員で、獣医師の私とは全く違う分野の職員でした



写真1 液状化により浮き上がったマンホールは通行の妨げとなった



写真2 多くのトンネルで上部の土砂が崩れ落ちていた

が、お互いに声を掛け合い、作業を補完し合うことで、より円滑な活動が可能になりました。

(2) 避難所環境の評価

避難所では、ラピッドアセスメントシート（以下、調査票）^{※2}を用いて環境評価が行われていました。この調査票は、避難所や周辺地域における被災状況やライフラインの状況を確認するとともに、避難所の

避難者数や要配慮者数、健康状態の把握などに活用されていました。誰でも適切に避難所の環境を評価できるよう設計されており、2～3日に一度の巡回で更新されていました。調査票に入力した避難所単位の情報は、災害時保健医療福祉活動支援システム（D24H）^{※3}で共有され、迅速かつ効率的に医療、保健、福祉の専門職チームの派遣や物資等の供給に活用されました。

一方で、調査票だけでは避難所での生活環境に関する細かな部分が見えにくいことがわかりました。避難所の状況が改善されてきた段階だからこそ、環境衛生監視員のような専門知識を持つ職員が避難所の環境衛生を確認し、必要な対策を現地で直接伝えられたらよいと感じました。

※2：避難所を中心に周辺地域の被災状況やニーズを適切に把握し、分野横断的に情報共有を図ることにより、迅速な支援の優先付けを可能とすることを目的に作成された避難所に関するアセスメント調査票

※3：芝浦工業大学が主となって開発したシステムで、災害時に必要な保健、医療、福祉に関する情報をシステムに入力するとその情報が国や自治体などの災害対応関係者に自動共有される仕組み

環境衛生監視員としての試み

(1) 避難所の環境確認

3月26日、小雨が一日中降る寒いなか、巡回先の避難所Aを訪問しました。在室中の避難者はほんの5名で、ほとんどの避難者が自宅の片付け等で不在でした。

避難所Aでは、フローリングの広い研修室と、18畳程度の和室とが避難者の居室として使用されていました。研修室には、屋外に面した大きな窓があり、2台設置されていたエアコンは、うち1台を23℃設定で稼働させていました。持参した非分散型赤外線式二酸化炭素濃度測定器（CO₂モニター）をテーブルの上に設置し、しばらく

写真3 避難所居室のCO₂濃度測定

写真4 避難所居室として使用されていた研修室の様子

して確認すると、CO₂濃度535ppm、温度21.0℃、湿度47.2%でした（写真3・写真4）。建築物衛生法で定められている空気環境の基準（CO₂濃度：1,000ppm以下／温度：18～28℃／湿度：40～70%）と比較し、適切に保たれていることを確認しました。

（2）聞き取り時のコミュニケーション

避難所での会話を通じて、より具体的な質問の仕方が重要だと気づきました。例えば、窓際に布団を敷いて寝ている方に単に「寒くないですか?」と聞くのではなく、「夜中寒くて目が覚めたことはありましたか?」「足が冷えてなかなか眠れないということはありませんでしたか?」といった聞き方をすることで、避難者の実際の生活状況をより詳しく把握できることがわかりました。

（3）環境衛生の観点からの助言

避難所での観察を通じて、いくつかの環境衛生上の問題点に気づきました。例えば、床に布団を敷いて寝ている方の顔の位置が、ハウスダストが舞いやすい床から30cm以内の高さにあることや、清掃用具が廊下に出したまま、適切に保管されていないことなどです。

これらの問題点について避難所管理者に、「戸つきの収納場所はありますか? モップ等は廊下に出しておくとか埃が舞い上がってよくないので、収納庫などにしま

ほうがよいですよ」と助言を試みましたが、「気づいたときに避難者のみなさんがモップがけをされるため、しまっておいてもすぐに出してきてまた同じ場所に置かれるのです」と返事がありました。避難所で不自由な生活を強いられるなか、衛生的に過ごす努力をされている方々へどう伝えるべきか、避難者の負担にならないよう配慮することの難しさ、適切な判断と伝え方の重要性を痛感しました。

（4）被災者への寄り添い

必要物品の調達をしに出かけた際、移動シャワー車が停まっているのを見つけ近くと、ひとりの女性から「ぜひ見て行ってください」と声をかけてもらいました。その女性は、ボランティア団体が設置したシャワー車の受付をしている地元の方でした。一通り見せていただいた後、「若者がみんな能登から出ていってしまって寂しくて仕方ない、この町はもう終わりだ」と涙ぐみながら話されました。最初は何と声をかけてよいのか言葉に詰まりましたが、復旧作業を一生懸命されている作業員や全国から支援に訪れている大勢の関係者の姿を見て感じた復旧・復興への兆しを、「もう終わりなんかじゃないですよ。どんどん復旧していていますよ。これからは復興のフェーズです。次は必ず、観光で訪問しま

す！」と自分なりに伝えました。この時私は、「業務調整員」や「環境衛生監視員」であることは被災者には関係なく、「人」として寄り添うことも被災地支援では求められるのだと強く感じました。自分はどんなふうに被災者に寄り添えるのか、派遣前にイメージを持つてみることも大切だと感じました。

支援者の生活環境

支援者用の施設（ベースキャンプ）※⁴の衛生状態にも多くの問題がありました（写真5）。

※4：国が準備した施設。武道場のなかにテントが30張設置され、各テントに1～2名の支援自治体職員が寝泊まりする。

（1）空気環境

ベースキャンプでは、CO₂濃度、温度、湿度を測定しました（図1）。常に締め切られており、換気不十分な室内のCO₂濃度は非常に高く、測定上限値の10,000ppmに達



写真5 ベースキャンプ居室内に並ぶテント

することもありました。これは、換気をしていなかったこと、夜になると石油ストーブを焚いていたこと、滞在者が多かったことが要因と考えられました。また、石油ストーブから出る臭いや粉じんの発生による空気の悪化も懸念されました。換気をしようにも窓には網戸がなく、ムカデなどが侵

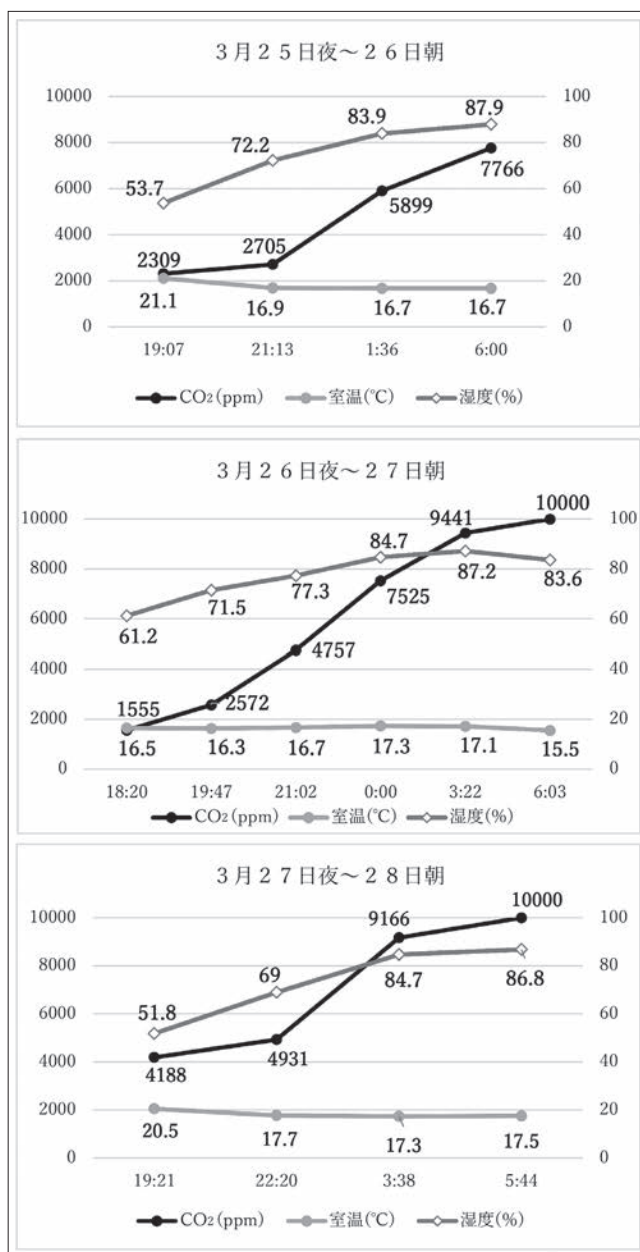


図1 ベースキャンプ滞在中のCO₂濃度、温度、湿度の変化

入してくる恐れがありました。

室内の温度は比較的安定していましたが、湿度は朝にかけて上昇し、80%を超えました(写真6)。この高湿度により、窓やドアには結露が発生し、カビの繁殖も確認できました(写真7)。

(2) 清掃ルールの不在

清掃ルールが設けられていなかったため、テントの周辺や部屋の隅に髪の毛や埃が集まっている状況が見られました(写真8)。

これらの問題は、支援者の健康に悪影響を与える可能性があり、生活するうえでのルールを設けることは人の健康を守るためにとても大切なことだと気がついたとともに、早急な改善が必要だと感じました。注目されるのは被災者の生活や健康についてですが、被災地での生活再建には支援者の協力があってこそた

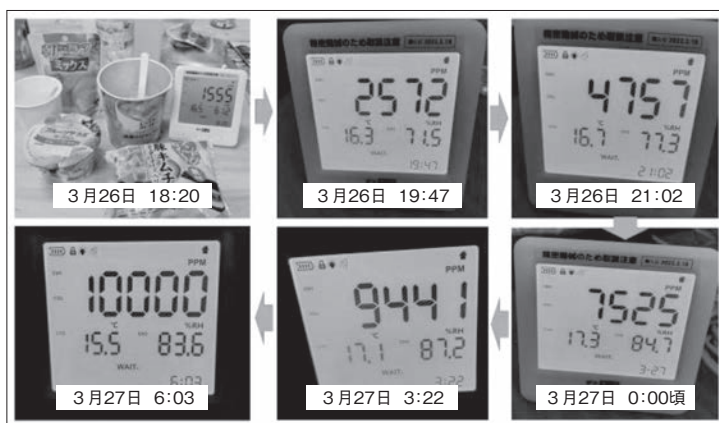


写真6 ベースキャンプ居室内のCO₂モニター値の推移



写真7 ドアガラスに発生した結露とカビ

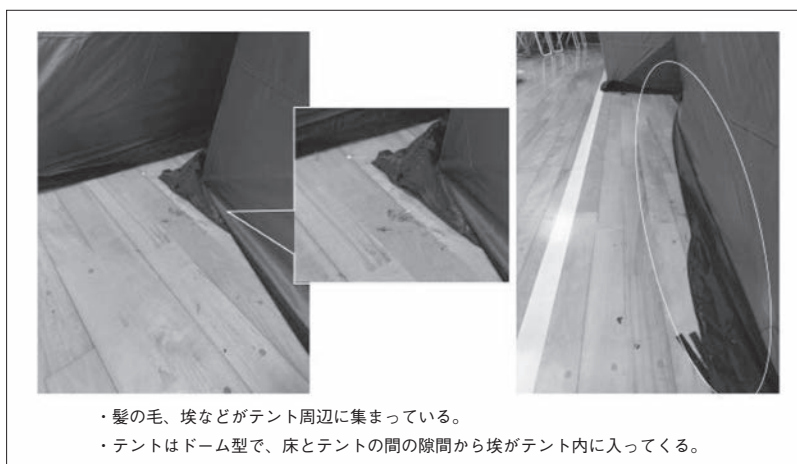


写真8 空気の流れや静電気等により集まったテント周辺の埃

め、健康を害することなく活動するために、支援者も環境衛生について配慮するべきだと強く思いました。

まとめと今後の課題

(1) 環境衛生監視員の専門知識の重要性

ある程度環境が整ったフェーズでの避難所巡回では、限られた時間のなかで個々の避難所の課題をスピーディに見つけ出し、改善への助言が求められます。環境衛生監視員の持つ、空気環境、水、トイレ、感染症、食品、衛生害虫などについての幅広い知識を活かすことで、効果的な改善策を提案できると考えます。

(2) コミュニケーションスキルの向上

被災者との会話や助言の仕方について、より適切なアプローチを学ぶ必要があります。単に問題点を指摘するだけでなく、被災者の立場に立って考え、負担にならない形で改善策を提案する能力が求められるからです。

(3) 支援者の生活環境への配慮

被災者だけでなく、支援者の健康を守るための環境整備も重要です。ベースキャンプの空気環境改善、適切な温湿度管理、ルールの設定など、支援者が健康に活動できる環境づくりが必要です。

(4) 平時の準備

避難所巡回での環境衛生の評価は、「この生活環境で過ごすと、こういった健康上の問題が起きる可能性がある。では、なぜそのような環境になっているのか？ その環境をどう改善していけば人々の健康は守られるのか？」といった環境衛生監視員の視点が大切です。どこに問題があるかに気づく能力は日々の監視業務で培われますが、それだけでは十分ではないと感じています。日々の業務だけでは知る機会のない避難所衛生や災害時の衛生（トイレや水など）について自ら学び、平時から備えてい

くことが自然災害の発生の多い日本の環境衛生監視員に求められているのではないのでしょうか。

(5) 多職種連携の重要性

保健師活動の補助業務を通して、保健師等他の職種との連携の重要性も再認識しました。復旧・復興には、あらゆる関係機関との連携が欠かせません。多角的に物事を考えられる視点を養うことが重要です。環境衛生の視点だけでなく、医療や福祉、地域振興などそれぞれの職種の視点から感じたことをチーム内で共有し、自分にはない考え方や共通する部分など意見を交換できたことはよい経験となりました。

おわりに

被災地での活動は、これまで学んできた知識と現場をつなぐ貴重な機会となりました。

この経験を通じて、環境衛生監視員として災害支援に貢献できる可能性を強く感じました。同時に、自分自身の課題も明確になりました。自分の気づきやアドバイスを現場の支援に十分に活かせなかったことは大きな反省点です。時と場所を考え、誰に・何を・どのように・どこまで伝えるのか。これらは今後の私の大きな課題です。

「災害は忘れた頃にやってくる」とよく言われますが、私は「災害は忘れなくてもやってくる」と感じています。いつ大きな災害が発生しても、環境衛生監視員として適切な支援ができるよう、これからも継続して準備に取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、令和6年能登半島地震で亡くなられた方々に心から哀悼の意を表します。

また、寄稿の勧めやご指導を賜りました、オフィス環監未来塾 代表 中臣昌広先生に深謝いたします。